

I am a Cat – Chapter 9b (Natsume Sōseki)

「おい冗談じゃない。何をしているんだ、御客さんだよ」

「おや君か」

「おや君かもしれないもんだ。そこにいるなら何とか云えばいいのに、まるで空家のようじゃないか」

「うん、ちと考え事があるもんだから」

「考えていたって通れくらいは云えるだろう」

「云えん事もないさ」

「相変らず度胸がいいね」

「せんだってから精神の修養を力めているんだもの」

「物好きだな。精神を修養して返事が出来なくなった日には来客は御難だね。そんなに落ちつかれちゃ困るんだぜ。実は僕一人来たんじゃないよ。大変な御客さんを連れて来たんだよ。ちょっと出て逢ってくれ給え」

「誰を連れて来たんだい」

「誰でもいいからちょっと出て逢ってくれたまえ。是非君に逢いたいと云うんだから」

「誰だい」

「誰でもいいから立ちたまえ」

主人は懐手のままぬっと立ちながら「また人を担ぐつもりだろう」と椽側へ出て何の気もつかずに客間へ這入り込んだ。すると六尺の床を正面に一個の老人が肅然と端坐して控えている。主人は思わず懐から両手を出してぺたりと唐紙の傍へ尻を片づけてしまった。こ

れでは老人と同じく西向きであるから双方共挨拶のしようがない。昔堅気むかしかたぎの人は礼義れいぎはやかましいものだ。

「さあどうぞあれへ」と床の間の方を指して主人しゅじんを促うながす。主人は両三年前までは座敷はどこへ坐すわっても構かまわんものと心得こころえていたのだが、その後ある人から床の間の講釈こうしゃくを聞いて、あれは上段じょうだんの間の変化へんかしたもので、上使じょうしが坐すわる所ところだと悟さとって以来決いらいけつして床の間へは寄りつかない男おとこである。ことに見みず知しらずの年長ねんちようしゃ者が頑がんと構かまえているのだから上座じょうざどころではない。挨拶あいさつさえ碌ろくには出来できない。一応いちおう頭あたまをさげて

「さあどうぞあれへ」と向むかうの云いう通とおりを繰くり返かえした。

「いやそれでは御挨拶ごあいさつが出来できかねますから、どうぞあれへ」

「いえ、それでは……どうぞあれへ」と主人かげんはいい加減せんぼうに先方こうじょうの口上まねを真似まねている。

「どうもそう、御謙遜ごけんそんでは恐れ入おそる。かえって手前てまえが痛み入いたる。どうか御遠慮ごえんりょなく、さあどうぞ」

「御謙遜ごけんそんでは……恐おそれますから……どうか」主人まっかは真赤まっかになつて口くちをもごもご云いわせている。精神せいしん修養しゅうようもあまり効果こうかがないようである。迷亭君めいていくんは襖ふすまの影かげから笑わらいながら立見たちみをしていたが、もういい時分じぶんだと思おもって、後うしろから主人しりの尻おを押しやりながら

「まあ出たまえ。そう唐紙からかみへくつついては僕ぼくが坐すわる所ところがない。遠慮えんりょせず前まへへ出たまえ」と無理むりに割わりり込こんでくる。主人えはやむを得えず前まへの方ほうへすり出る。

「苦沙弥君くしゃみこれが毎々まいまい君きみに噂うわさをする静岡しずおかの伯父おじだよ。伯父さんこれが苦沙弥君くしゃみです」

「いや始めて御目ごめにかかります、毎度迷亭まいどが出て御邪魔おじゃまを致いたすそうで、いつか参上さんじょうの上うへ御高話ごこうわを拝聴はいちやう致いたそうと存ぞんじておりましたところ、幸さいわい今日は御近所ごんにちを通行ごきんじょ致いたしたもので、御礼ごれい旁かたが伺たうった訳わけで、どうぞ御見知ごみしりおかれまして今後共宜こんごとよろしく」と昔むかし風ふうな口上こうじょうを淀よどみなく述こべたてる。主人こうさいは交際せまの狭むくちい、無口にんげんな人間こふうである上に、こんな古風じいな爺おやさんとほとんど出で会あった事ことがないのだから、最初さいしよから多少たしやう場ばうての気味きみで辟易へきえきしていたところ

へ、滔々と浴びせかけられたのだから、朝鮮仁参も飴ん棒の状袋もすっかり忘れてしま
ってただ苦しまぎれに妙な返事をする。

「私も……私も……ちょっと何がうはずでありましたところ……何分よろしく」と云い終
って頭を少々畳から上げて見ると老人は未だに平伏しているので、はっと恐縮してま
た頭をぴたりと着けた。

老人は呼吸を計って首をあげながら「私ももとはこちらに屋敷も在って、永らく御膝元で
くらしただけですが、瓦解の折にあちらへ参ってからとんと出てこんのでな。今来て見ると
まるで方角も分らんくらいで、——迷亭にでも伴れてあるいてもらわんと、とても用達も
出来ません。滄桑の変とは申しながら、御入国以来三百年も、あの通り將軍家の……」
と云いかけると迷亭先生面倒だと心得て

「伯父さん將軍家もありがたいかも知れませんが、明治の代も結構ですぜ。昔は赤十字なん
てもものなかつたでしょう」

「それはない。赤十字などと称するものは全くない。ことに宮様の御顔を拝むなどと云う
ことは明治の御代でなくては出来ぬ事だ。わしも長生きをした御蔭でこの通り今日の総会にも
出席するし、宮殿下の御声もきくし、もうこれで死んでもいい」

「まあ久し振りで東京見物をするだけでも得ですよ。苦沙弥君、伯父はね。今度赤十字の総
会があるのでわざわざ静岡から出て来てね、今日いっしょに上野へ出掛けたんだが今その帰
りがけなんだよ。それだからこの通り先日僕が白木屋へ注文したフロックコートを着ているの
さ」と注意する。なるほどフロックコートを着ている。フロックコートは着ているがすこしも
からだに合わない。袖が長過ぎて、襟がおっ開いて、背中へ池が出来て、腋の下が釣るし上
がっている。いくら不恰好に作ろうと云ったって、こうまで念を入れて形を崩す訳にはゆか
ないだろう。その上白シャツと白襟が離れ離れになって、仰むくと間から咽喉仏が見え
る。第一黒い襟飾りが襟に属しているのか、シャツに属しているのか判然しない。フロック
はまだ我慢が出来るが白髪のアヨン髷ははなはだ奇観である。評判の鉄扇はどうかと目を注
げると膝の横にちゃんと引きつけている。主人はこの時ようやく本心に立ち返って、精神
修養の結果を存分に老人の服装に応用して少々驚いた。まさか迷亭の話ほどではな

かろうとおもっていたが、あ逢って見ると話以上（いじょう）にである。もし自分のあばた（じぶん）が歴史的（れきしてきけんきゅう）研究（けんきゅう）の材料（ざいりょう）になるならば、この老人（らうじん）のチョン髻（チョン）や鉄扇（てつせん）はたしかにそれ以上の価値（かち）がある。主人（しゅじん）はどうかしてこの鉄扇（てつせん）の由来（ゆらい）を聞いて見たい（き）と思ったが、まさか、打ちつけ（うちつけ）に質問（しつもん）する訳（わけ）には行（い）かず、と云（い）って話を途切（とぎ）らすのも礼（れい）にと思（おも）って

「だいぶ人（ひと）が出（で）ましたろう」と極めて尋常（じんじょう）な問（と）をかけた。

「いや非常（ひじょう）な人（ひと）で、それでその人（ひと）が皆（みんな）わしをじろじろ見（み）るので——どうも近來（きんらい）は人間（にんげん）が物見高（ものみだか）くなつたよう（むか）ですがすな。昔（むか）しはあんなではなかつたが」

「ええ、さよう、昔（むか）はそんなではなかつたですな」と老人（らうじん）らしい事（こと）を云（い）う。これはあながち主人（しゅじん）が知（し）つ高振（たかぶ）りをした訳（わけ）ではない。ただ朦朧（もうろう）たる頭腦（づのう）から好（い）い加減（かげん）に流（なが）れ出す言（げんご）語（ご）と見（み）れば差（さ）し支（つか）えな（な）い。

「それにな。皆（みんな）この甲割（かぶわり）へ目（め）を着（つ）けるので」

「その鉄扇（てつせん）は大分（だいぶん）重（おも）いものでございましょう」

「苦沙弥（くしゃみく）君（くん）、ちよつと持（も）つて見（み）たまえ。なかなか重（おも）いよ。伯父（おじ）さん持（も）たして御覽（ごらん）なさい」

老人（らうじん）は重（おも）たそうに取（と）りあ（あ）げて「失礼（しつれい）でがすが」と主人（しゅじん）に渡（わた）す。京都（きょうと）の黒谷（くろだに）で参詣（さんけい）人（にん）が蓮生坊（れんじょうぼう）の太刀（たち）を戴（いた）だくようなかたで、苦沙弥（くしゃみく）先生（せんせい）しばらく持（も）つていたが「なるほど」と云（い）つたまま老人（らうじん）に返（へん）却（きゃく）した。

「みんながこれを鉄扇（てつせん）鉄扇（てつせん）と云（い）うが、これは甲割（かぶわり）と称（とな）えて鉄扇（てつせん）とはまるで別物（べつもの）で……」

「へえ、何（なん）にしたものでございましょう」

「兜（かぶと）を割（わ）るので、——敵（てき）の目（め）がくらむ所（ところ）を撃（う）ちとつたものでがす。楠（くすのき）正成（まささしげ）時代（じだい）から用（もち）いたよう（むか）で……」

「伯父（おじ）さん、そりゃ正成（まささしげ）の甲割（かぶわり）ですかね」

「いえ、これは誰（だれ）のかわからん。しかし時代（じだい）は古（ふる）。建武（けんむ）時代の作（さく）かも知（し）れない」

「建武時代かも知れないが、寒月君は弱ってしまいましたぜ。苦沙弥君、今日帰りにちょうどいい機会だから大学を通り抜けるついでに理科へ寄って、物理の実験室を見せて貰ったところがね。この甲割が鉄だものだから、磁力の器械が狂って大騒ぎさ」

「いや、そんなはずはない。これは建武時代の鉄で、性のいい鉄だから決してそんな虞れはない」

「いくら性のいい鉄だってそうはいきませんよ。現に寒月がそう云ったから仕方がないです」

「寒月というのは、あのガラス球を磨っている男かい。今の若さに気の毒な事だ。もう少し何かやる事がありそうなものだ」

「可愛想に、あれだって研究でさあ。あの球を磨り上げると立派な学者になれるんですからね」

「玉を磨りあげて立派な学者になれるなら、誰にでも出来る。わしにでも出来る。ビードロやの主人にでも出来る。ああ云う事をする者を漢土では玉人と称したもので至って身分の軽いものだ」と云いながら主人の方を向いて暗に賛成を求める。

「なるほど」と主人はかしこまっている。

「すべて今の世の学問は皆形而下の学でちょっと結構なようだが、いざとなるとすこしも役には立ちませんてな。昔はそれと違って侍は皆命懸けの商買だから、いざと云う時に狼狽せぬように心の修業を致したもので、御承知でもあらっしゃろうがなかなか玉を磨ったり針金を縋ったりするような容易いものではなかったのがすよ」

「なるほど」とやはりかしこまっている。

「伯父さん心の修業と云うものは玉を磨る代りに懐手をして坐り込んでるんでしょ」

「それだから困る。決してそんな造作のないものではない。孟子は求放心と云われたくらいだ。邵康節は心要放と説いた事もある。また仏家では中峯和尚と云うのが具不退転と云う事を教えている。なかなか容易には分らん」

「どうてい分りっこありませんね。全体ぜんたいどうすればいいんです」

「御前おまえは沢菴たくあんぜんじ禪師ふどうちしんみょうろくの不動智神妙録よというものをこと読んだ事があるかい」

「いいえ、聞いた事きもありません」

「心こころをどこに置おこうぞ。敵てきの身みの働はたらきに心こころを置おけば、敵てきの身みの働はたらきに心こころを取とらるるなり。敵てきの太刀たちに心こころを置おけば、敵てきの太刀たちに心こころを取とらるるなり。敵てきを切きらんと思おもうところに心こころを置おけば、敵てきを切きらんと思おもうところに心こころを取とらるるなり。わが太刀わがに心こころを置おけば、我わが太刀わがに心こころを取とらるるなり。われ切きられじと思おもうところに心こころを置おけば、切きられじと思おもうところに心こころを取とらるるなり。人ひとの構かまえに心こころを置おけば、人ひとの構かまえに心こころを取とらるるなり。とかく心こころの置おきどころはないとある」

「よく忘れわすずに暗誦あんしょうしたものですおじね。伯父おじさんきおくもなかなか記憶ながいい。長ながいじゃありませんか。苦沙弥君くしゃみくん分わかったかい」

「なるほど」と今度こんどもなるほどですましてしまった。

「なあ、あなた、そうでござりましょう。心こころをどこに置おこうぞ、敵てきの身みの働はたらきに心こころを置おけば、敵てきの身みの働はたらきに心こころを取とらるるなり。敵てきの太刀たちに心こころを置おけば……」

「伯父おじさん苦沙弥君くしゃみくんはそんな事ことは、よく心得こころえているんですよ。近頃ちかごろは毎日まいにち書齋しょさいで精神せいしんの修養しゅうようばかりしているんですから。客きやくがあつても取次とりつぎに出でないくらい心こころを置おき去ぎりにしているんだから大丈夫だいじょうぶですよ」

「や、それは御奇特ごきどくな事ことで——御前おまえなどもちとごいっしょにやったらよかろう」

「へへへそんな暇ひまはありませんよ。伯父おじさんは自分じぶんが楽らくなからだだもんだから、人ひとも遊あそんでると思おもっていらっしゃるんでしょ」

「実じつ際さい遊あそんでるじゃないかの」

「ところが閑中かんちゅう自おのらずから忙ぼうありでね」

「そう、粗忽^{そこつ}だから修業^{しゆぎょう}をせんといかないと云うのよ、忙中^{ぼうちゆう}自^{おの}ら閑^{かずか}ありと云う成句^{せいこ}はあるが、閑中^{きんちゆう}自^{おの}ら忙^{いそ}ありと云うのは聞いた事^{こと}がない。なあ苦沙弥^{くさみ}さん」

「ええ、どうも聞きませんようで」

「ハハハハそうなっちゃあ敵^{かな}わない。時^{とき}に伯父^{おじ}さんどうです。久^{ひさ}し振^ぶりで東京^{とうきょう}の鰻^{うなぎ}でも食^くっちゃあ。竹葉^{ちくよう}でも奢^{おご}りましょう。これから電車^{でんしゃ}で行^ゆくとすぐです」

「鰻^{うなぎ}も結構^{けっこう}だが、今日^{きょう}はこれからすい原^{はら}へ行く約束^{やくそく}があるから、わしはこれで御免^{ごめん}を蒙^{こうむ}ろう」

「ああ杉原^{すぎはら}ですか、あの爺^{じい}さんも達者^{たっしゃ}ですね」

「杉原^{すぎはら}ではない、すい原^{すいげん}さ。御前^{おまえ}はよく間違^{まちがえ}ばかり云^いって困^{こま}る。他人^{たにん}の姓名^{せいめい}を取り違^とえるのは失礼^{しつれい}だ。よく気^きをつけんといけない」

「だって杉原^{すぎはら}とかいてあるじゃありませんか」

「杉原^{すぎはら}と書いてすい原^{すいげん}と読むのさ」

「妙^{みょう}ですね」

「なに妙な事^{こと}があるものか。名目^{みょうもく}読みと云^{むか}って昔^{むか}しからある事^{こと}さ。蚯蚓^{きゅういん}を和名^{わみょう}でみみずと云^いう。あれは目見^{めみ}ずの名目^{なみ}よみで。蝦蟆^{がま}の事^{こと}をかいると云^いうのと同じ事^{こと}さ」

「へえ、驚^{おど}ろいたな」

「蝦蟆^{がま}を打ち殺^{ころ}すと仰向^{あおむ}きにかえる。それを名目^{なみ}読みにかいると云^いう。透垣^{すきがき}をすい垣^{がき}、茎立^{くきたち}をくく立^{だち}、皆^{みんな}同じ事^{こと}だ。杉原^{すぎはら}をすぎ原^{すぎはら}などと云^いうのは田舎^{いなか}もの言葉^{ことば}さ。少し気^{すこ}を付^きけないと人^{ひと}に笑^{わら}われる」

「じゃ、その、すい原^{すいげん}へこれから行くんですか。困^{こま}ったな」

「なに厭^{いや}なら御前^{おまえ}は行^いかんでもいい。わし一人^{ひとり}で行^いくから」

「一人で行けますかい」

「あるいてはむずかしい。車^{くるま}を雇^{やと}って頂^{いただ}いて、ここから乗^のって行こう」

主人^{しゅじん}は畏^{かしこ}まって直^{ただ}ちに御三^{おさん}を車屋^{くるまや}へ走^{はし}らせる。老人^{ろうじん}は長々^{ながなが}と挨拶^{あいさつ}をしてチョン髷^{まげ}頭^{あたま}へ山高帽^{やまたかぼう}を^{かえ}いただいて帰^いって行く。迷亭^{めいてい}はあとへ残^{のこ}る。

「あれが君^{きみ}の伯父^{おじ}さんか」

「あれが僕^{ぼく}の伯父^{おじ}さんさ」

「なるほど」と再^{ふたた}び座蒲団^{ざぶとん}の上^{うへ}に坐^{すわ}ったなり懐^{ふところ}手^かをして考^{かんが}え込^こんでいる。

「ハハハ豪傑^{ごうけつ}だろう。僕^{ぼく}もああ云^いう伯父^{おじ}さんを持^もって仕合^{しあわ}せなものさ。どこへ連^つれて行^いってもあの通^{とお}りなんだぜ。君^{きみ}驚^{きみおど}ろいたろう」と迷亭^{めいてい}君^{くん}は主人^{しゅじん}を驚^{おおい}ろかしたつもりで大^{よろこ}に喜^{よろこ}んでいる。

「なにそんなに驚^{おど}きやしない」

「あれで驚^{おど}かなけりや、胆^{たんりよく}力^{すわ}の据^{すわ}ったもんだ」

「しかしあの伯父^{おじ}さんはなかなかえらいところがあるようだ。精神^{せいしん}の修養^{しゅうよう}を主^{しゅちよう}張^{ちやう}するところなぞは大^{おおい}に敬服^{けいふく}していい」

「敬服^{けいふく}していいかね。君^{きみ}も今^{いま}に六^{ろく}十^{じゅう}くらいになるとやっぱりあの伯父^{おじ}見たように、時^{とき}候^{じこう}おくれになるかも知^しれないぜ。しっかりしてくれたまえ。時^{とき}候^{じこう}おくれの廻^{まわ}り持^もちなんか気^きが利^きかないよ」

「君^{きみ}はしきりに時^{とき}候^{じこう}おくれを気^きにするが、時^{とき}と場^ば合^{あい}によると、時^{とき}候^{じこう}おくれの方^{ほう}がえらいんだぜ。第一^{だいいち}今^{いま}の学^{がく}問^{もん}と云^いうものは先^{さき}へ先^ゆへと行^いくだけで、どこまで行^いったって際^{さい}限^{げん}はありやしない。とうてい満^{まん}足^{ぞく}は得^えられやしない。そこへ行^いくと東^{とう}洋^{よう}流^{りゅう}の学^{がく}問^{もん}は消^{しょう}極^{きよく}的^{てき}で大^{おおい}に味^{あじ}がある。心^{こころ}そのもの修^{しゆ}業^{ぎよう}をするのだから」とせんだって哲^{てつ}学^{がく}者^{しゃ}から承^うけ^けた通^{とお}りを自^じ説^{せつ}のよう^{よう}に述^のべ立^たてる。

「えらい事^{こと}になつて来^きたぜ。何^{なん}だか八^や木^ぎ独^{どく}仙^{せん}君^{くん}のよう^{よう}な事^{こと}を云^いつてるね」

八木独仙と云う名を聞いて主人ははっと驚ろいた。実はせんだって臥竜窟を訪問して主人を説服に及んで悠然と立ち帰った哲学者と云うのが取も直さずこの八木独仙君であって、今主人が鹿爪らしく述べ立てている議論は全くこの八木独仙君の受売なのであるから、知らんとおもった迷亭がこの先生の名を聞不容髪の際に持ち出したのは暗に主人の一夜作りの仮鼻を挫いた訳になる。

「君独仙の説を聞いた事があるのかい」と主人は剣呑だから念を推して見る。

「聞いたの、聞かないのって、あの男の説ときたら、十年前学校にいた時分と今日と少しも変わりゃしない」

「真理はそう変わるものじゃないから、変らないところがたのもしいかも知れない」

「まあそんな臍負があるから独仙もあれで立ち行くんだね。第一八木と云う名からして、よく出来るよ。あの髯が君全く山羊だからね。そうしてあれも寄宿舎時代からあの通りの恰好で生えていたんだ。名前の独仙なども振ったものさ。昔し僕のところへ泊りがけに来て例の通り消極的の修養と云う議論をしてね。いつまで立っても同じ事を繰り返してやめないから、僕が君もう寝ようじゃないかと云うと、先生気楽なものさ、いや僕は眠くないとすまし切って、やっぱり消極論をやるには迷惑したね。仕方がないから君は眠くなかろうけれども、僕の方は大変眠いのだから、どうか寝てくれたまえと頼むようにして寝かしたまではよかったが——その晩鼠が出て独仙君の鼻のあたまを噛ってね。夜なかに大騒ぎさ。先生悟ったような事を云うけれども命は依然として惜しかったと見えて、非常に心配するのさ。鼠の毒が総身にまわると大変だ、君どうかしてくれと責めるには閉口したね。それから仕方がないから台所へ行って紙片へ飯粒を貼ってごまかしてやったあね」

「どうして」

「これは舶来の膏薬で、近来独逸の名医が発明したので、印度人などの毒蛇に噛まれた時に用いると即効があるんだから、これさえ貼っておけば大丈夫だと云ってね」

「君はその時分からごまかす事に妙を得ていたんだね」

「……すると独仙君はああ云う好人物だから、全くだと思つて安心してぐうぐう寝てしまつたのさ。あくる日起きて見ると膏藥の下から糸屑がぶらさがつて例の山羊髯に引っかかつていたのは滑稽だったよ」

「しかしあの時分より大分えらくなつたようだよ」

「君近頃逢つたのかい」

「一週間ばかり前に来て、長い間話しをして行つた」

「どうりで独仙流の消極説を振り舞わすと思つた」

「実はその時大に感心してしまつたから、僕も大に奮発して修養をやろうと思つてるところなんだ」

「奮発は結構だがね。あんまり人の云う事を真に受けると馬鹿を見るぜ。一体君は人の言う事を何でもかでも正直に受けるからいけない。独仙も口だけは立派なものだがね、いざとなると御互と同じものだよ。君九年前の大地震を知つてるだろう。あの時寄宿の二階から飛び降りて怪我をしたものは独仙君だけなんだからな」

「あれには当人大分説があるようじゃないか」

「そうさ、当人に云わせるとすこぶるありがたいものさ。禅の機鋒は峻峭なもので、いわゆる石火の機となると怖いくらい早く物に應ずる事が出来る。ほかのものが地震だと云つて狼狽しているところを自分だけは二階の窓から飛び下りたところに修業の効があらわれて嬉しいと云つて、跛を引きながらうれしがつていた。負惜みの強い男だ。一体禅とか仏とか云つて騒ぎ立てる連中ほどあやしいのはないぜ」

「そうかな」と苦沙弥先生少々腰が弱くなる。

「この間来た時禅宗坊主の寝言見たような事を何か云つてつたろう」

「うん電光影裏に春風を斬るとか云う句を教へて行つたよ」

「その電光さ。あれが十年前からの御箱なんだからおかしいよ。無覚禅師の電光ときたら
寄宿舍中誰も知らないものはないくらいだった。それに先生時々せき込むと間違えて電光
影裏を逆さまに春風影裏に電光をきると云うから面白い。今度ためして見たまえ。向で落ち
つき払って述べたてているところを、こっちでいろいろ反対するんだね。するとすぐ顛倒し
て妙な事を云うよ」

「君のようないたずらものに逢っちゃ叶わない」

「どっちがいたずら者だか分りやしない。僕は禅坊主だの、悟ったのは大嫌だ。僕の近所
に南蔵院と云う寺があるが、あすこに八十ばかりの隠居がいる。それでこの間の白雨の時
寺内へ雷が落ちて隠居のいる庭先の松の木を割いてしまった。ところが和尚泰然として平気
だと云うから、よく聞き合わせて見るとから聾なんだね。それじゃ泰然たる訳さ。大概そん
なものさ。独仙も一人で悟っていればいいのだが、ややともすると人を誘い出すから悪い。
現に独仙の御蔭で二人ばかり気狂にされているからな」

「誰が」

「誰がって。一人は理野陶然さ。独仙の御蔭で大に禅学に凝り固まって鎌倉へ出掛けて行
って、とうとう出先で気狂になってしまった。円覚寺の前に汽車の踏切りがあるだろう、あの
踏切り内へ飛び込んでレールの上で座禅をするんだね。それで向うから来る汽車をとめて見せ
ると云う大気焔さ。もっとも汽車の方で留ってくれたから一命だけはとりとめたが、その代
り今度は火に入って焼けず、水に入って溺れぬ金剛不壊のからだだと号して寺内の蓮池へ
這入ってぶくぶくあるき廻ったもんだ」

「死んだかい」

「その時も幸、道場の坊主が通りかかって助けてくれたが、その後東京へ帰ってか
ら、とうとう腹膜炎で死んでしまった。死んだのは腹膜炎だが、腹膜炎になった原因は僧堂
で麦飯や万年漬を食ったせいだから、つまるところは間接に独仙が殺したようなものさ」

「むやみに熱中するのも善し悪しだね」と主人はちょっと気味の悪いという顔付をする。

ほんとう
「本当にさ。独仙にやられたものももう一人同窓中にある」

だれ
「あぶないね。誰だい」

たちまちろうばいくん おとこ まった うなぎ てんじょう こと い
「立町老梅君さ。あの男も全く独仙にそそのかされて鰻が天上するような事ばかり言
っていたが、とうとう君本物になってしまった」

なん
「本物たあ何だい」

ぶた せんじん
「とうとう鰻が天上して、豚が仙人になったのさ」

「何の事だい、それは」

やぎ どりくせん ぶたせん く いじ
「八木が独仙なら、立町は豚仙さ、あのくらい食い意地のきたない男はなかったが、あの食
意地と禅坊主のわる意地が併発したのだから助からない。始めは僕らも気がつかなかったが
今から考えると妙な事ばかり並べていたよ。僕のうちなどへ来て君あの松の木へカツレツ
が飛んできやしませんかの、僕の国では蒲鉾が板へ乗って泳いでいますのって、しきりに
警句を吐いたものさ。ただ吐いているうちはよかったが君表のどぶへ金とんを掘りに行きま
しょうと促がすに至っては僕も降参したね。それから二三日するとついに豚仙になって巢鴨へ
収容されてしまった。元来豚なんぞが気狂になる資格はないんだが、全く独仙の御蔭であす
こまで漕ぎ付けたんだね。独仙の勢力もなかなかえらいよ」

いま すがも
「へえ、今でも巢鴨にいるのかい」

じだいきょう だいきえん は ちかごろ たちまちろうばい な
「いるだんじゃない。自大狂で大気焔を吐いている。近頃は立町老梅なんて名はつまらない
と云うので、自ら天道公平と号して、天道の権化をもって任じている。すさまじいものだ
よ。まあちょっと行って見たまえ」

「天道公平？」

きちがい くせ ときどき こうへい か こと
「天道公平だよ。気狂の癖にうまい名をつけたものだね。時々は孔平とも書く事がある。そ
れで何でも世人が迷ってるからぜひ救ってやりたいと云うので、むやみに友人や何かへ手紙
を出すんだね。僕も四五通貰ったが、中にはなかなか長い奴があつて不足税を二度ばかりと
られたよ」

「それじゃ僕の所へ来たのも老梅から来たんだ」

「君の所へも来たかい。そいつは妙だ。やっぱり赤い状袋だろう」

「うん、真中が赤くて左右が白い。一風変わった状袋だ」

「あれはね、わざわざ支那から取り寄せるのだそうだよ。天の道は白なり、地の道は白なり、人は中間に在って赤しと云う豚仙の格言を示したんだって……」

「なかなか因縁のある状袋だね」

「気狂だけに大に凝ったものさ。そして気狂になっても食意地だけは依然として存しているものと見えて、毎回必ず食物の事がかいてあるから奇妙だ。君の所へも何とか云って来たろう」

「うん、海鼠の事がかいてある」

「老梅は海鼠が好きだったからね。もつともだ。それから？」

「それから河豚と朝鮮仁参か何か書いてある」

「河豚と朝鮮仁参の取り合せは旨いね。おおかた河豚を食って中ったら朝鮮仁参を煎じて飲めども云うつもりなんだろう」

「そうでもないようだ」

「そうでなくても構わないさ。どうせ気狂だもの。それっきりかい」

「まだある。苦沙弥先生御茶でも上がれと云う句がある」

「アハハハ御茶でも上がればきびし過ぎる。それで大に君をやり込めたつもりに違ない。大出来だ。天道公平君万歳だ」と迷亭先生は面白がって、大に笑い出す。主人は少からざる尊敬をもって反覆読誦した書翰の差出人が金箔つきの狂人であると知ってから、最前の熱心と苦心が何だか無駄骨のような気がして腹立たしくもあり、また瘋癲病者の文章をさほど心労して翫味したかと思うと恥ずかしくもあり、最後に狂人の作にこれほど

かんぷく いじょう じぶん たしょうしんけい いじょう ぎねん りっぷく ざんき
感服する以上は自分も多少神経に異状がありはせぬかとの疑念もあるので、立腹と、慚愧
と、心配の合併した状態で何だか落ちつかない顔付をして控えている。

おり おもてごうし あ おも くつ おと ふ あし くつぬぎ ひび
折から 表 格子をあららかに開けて、重い靴の音が二た足ほど沓脱に響いたと思ったら「ち
よっと頼みます、ちよっと頼みます」と大きな声がする。主人の尻の重いに反して迷亭はま
たすこぶる気軽な男であるから、御三の取次に出るのも待たず、通れと云いながら隔ての中
の間を二た足ばかりに飛び越えて玄関に躍り出した。人のうちへ案内も乞わずにつかつか
は い こ めいわく しよせいどうよう つと
這入り込むところは迷惑のようだが、人のうちへ這入った以上は書生同様取次を務めるから
はなはだ便利である。いくら迷亭でも御客さんには相違ない、その御客さんが玄関へ出張
するのに主人たる苦沙弥先生が座敷へ構え込んで動かん法はない。普通の男ならあとから引き
つづ しゅつじん へいき ざぶとん うえ しり お
続いて出陣すべきはずであるが、そこが苦沙弥先生である。平気に座布団の上へ尻を落ちつ
けています。但し落ちつけているのと、落ちついているのとは、その趣は大分似ているが、そ
の じっしつ ちが
の実質はよほど違う。

げんかん と だ めいてい なに べん おく ほう む ごしゅじん
玄関へ飛び出した迷亭は何かしきりに弁じていたが、やがて奥の方を向いて「おい御主人ち
よっと御足労だが出てくれたまえ。君でなくっちゃ、間に合わない」と大きな声を出す。
しゅじん え ふところ みる と 迷亭君は一枚の名刺を握っ
たまましゃがんで挨拶をしている。すこぶる威厳のない腰つきである。その名刺には警視庁
けいじしゅんさよしだたらぞう なら た にじゅうごろく せい たか
刑事 巡査 吉田 虎蔵とある。虎蔵君と並んで立っているのは二十五六の背の高い、いなせな
とうざん おとこ みょう こと おな むごん つった
唐 棧 ずくめの男である。妙な事にこの男は主人と同じく懐手をしたまま、無言で突立っ
ている。何だか見たような顔だと思ってよくよく観察すると、見たようなどころじゃない。この
あいだしんやごらいほう やま いも も い だろぼう こんど はくちゅうこうぜん
間 深夜御来訪になって山の芋を持って行かれた泥棒君である。おや今度は白昼公然と玄関
からおいでになったな。

「おいこの方は刑事巡査でせんだつての泥棒をつらまえたから、君に出頭しろと云うんで、
わざわざおいでになったんだよ」

主人はようやく刑事が踏み込んだ理由が分つたと見えて、頭をさげて泥棒の方を向いて鄭寧
におじぎ をした。泥棒の方が虎蔵君より男振りがいいので、こっちが刑事だと早合点をしたの
だろう。泥棒も驚ろいたに相違ないが、まさか私 が泥棒ですよと断わる訳にも行かなかつた
と見えて、すまして立っている。やはり懐手のままである。もつとも手錠をはめているのだから

ら、出そうと云っても出る気遣はない。通例のものならこの様子でたいていはわかるはずだが、この主人は当世の人間に似合わず、むやみに役人や警察をありがたがる癖がある。御上の御威光となると非常に恐しいものと心得ている。もっとも理論上から云うと、巡査などは自分達が金を出して番人に雇っておくのだくらいの事は心得ているのだが、実際に臨むといやにへえへえする。主人のおやじはその昔場末の名主であったから、上の者にびよこびよこ頭を下げて暮した習慣が、因果となつてかように子に酬ったのかも知れない。まことに気の毒な至りである。

巡査はおかしかったと見えて、にやにや笑いながら「あしたね、午前九時までに日本堤の分署まで来て下さい。――盗難品は何と何でしたかね」

「盗難品は……」と云いかけたが、あいにく先生たいがい忘れてる。ただ覚えてるのは多々良三平の山の芋だけである。山の芋などはどうでも構わんと思つたが、盗難品は……と云いかけてあとが出ないのはいかにも与太郎のようで体裁がわるい。人が盗まれたのならいざ知らず、自分が盗まれておきながら、明瞭の答が出来んのは一人前ではない証拠だと、思ひ切つて「盗難品は……山の芋一箱」とつけた。

泥棒はこの時よほどおかしかったと見えて、下を向いて着物の襟へあごを入れた。迷亭はアハハと笑いながら「山の芋がよほど惜しかったと見えるね」と云つた。巡査だけは存外真面目である。

「山の芋は出ないようだがほかの物件はたいがい戻つたようです。――まあ来て見たら分るでしょう。それでね、下げ渡したら請書が入るから、印形を忘れずに持つておいでなさい。――九時までに来なくてははいかん。日本堤分署です。――浅草警察署の管轄内の日本堤分署です。――それじゃ、さようなら」と独りで弁じて帰つて行く。泥棒君も続いて門を出る。手が出せないの、門をしめる事が出来ないから開け放しのまま行つてしまった。恐れ入りながらも不平と見えて、主人は頬をふくらして、ぴしゃりと立て切つた。

「アハハ君は刑事を大変尊敬するね。つねにああ云う恭謙な態度を持つてるといい男だが、君は巡査だけに鄭寧なんだから困る」

「だってせっかく知らせて来てくれたんじゃないか」

「知らせに来るたって、先は商売だよ。当り前にあしらってりゃ沢山だ」

「しかしただの商売じゃない」

「無論ただの商売じゃない。探偵と云ういけすかない商売さ。あたり前の商売より下等だね」

「君そんな事を云うと、ひどい目に逢うぜ」

「ハハハそれじゃ刑事の悪口はやめにしよう。しかし刑事を尊敬するのは、まだしもだが、泥棒を尊敬するに至っては、驚かざるを得んよ」

「誰が泥棒を尊敬したい」

「君がしたのさ」

「僕が泥棒に近付きがあるもんか」

「あるもんかって君は泥棒にお辞儀をしたじゃないか」

「いつ？」

「たった今平身低頭したじゃないか」

「馬鹿あ云ってら、あれは刑事だね」

「刑事があんななりをするものか」

「刑事だからあんななりをするんじゃないか」

「頑固だな」

「君こそ頑固だ」

「まあ第一、刑事が人の所へ来てあんなに懐手なんかして、突立っているものかね」

「刑事だって懐手をしないとは限るまい」

「そう猛烈にやって来ては恐れ入るがね。君がお辞儀をする間 あいつは始終あのままで立っていたのだぜ」

「刑事だからそのくらいの事はあるかも知れんさ」

「どうも自信家だな。いくら云っても聞かないね」

「聞かないさ。君は口先ばかりで泥棒だ泥棒だと云ってるだけで、その泥棒がはいるところを見届けた訳じゃないんだから。ただそう思っただけで強情を張ってるんだ」

迷亭もここにおいてとうてい濟度すべからざる男と断念したものと見えて、例に似ず黙ってしまった。主人は久し振りで迷亭を凹ましたと思っただけである。迷亭から見ると主人の価値は強情を張っただけ下落したつもりであるが、主人から云うと強情を張っただけ迷亭よりえらくなったのである。世の中にはこんな頓珍漢な事はままたある。強情さえ張り通せば勝った気でいるうちに、当人の人物としての相場は遥かに下落してしまう。不思議な事に頑固の本人は死ぬまで自分は面目を施こしたつもりかなにかで、その時以後人が軽蔑して相手にしてくれないのだとは夢にも悟り得ない。幸福なものである。こんな幸福を豚的幸福と名づけるのだそうだ。

「ともかくもあした行くつもりかい」

「行くとも、九時までに来いと云うから、八時から出て行く」

「学校はどうする」

「休むさ。学校なんか」と擲きつけるように云ったのは壮なものだった。

「えらい勢だね。休んでもいいのかい」

「いいとも僕の学校は月給だから、差し引かれる気遣はない、大丈夫だ」と真直に白状してしまった。ずるい事もずるいが、単純なことも単純なものだ。

「君、行くのはいいが路を知ってるかい」

「知るものか。車に乗って行けば訳はないだろう」とふんぷんしている。

「静岡の伯父に譲らざる東京通なるには恐れ入る」

「いくらでも恐れ入るがいい」

「ハハハ日本堤分署と云うのはね、君ただの所じゃないよ。吉原だよ」

「何だ？」

「吉原だよ」

「あの遊廓のある吉原か？」

「そうさ、吉原と云やあ、東京に一つしかないやね。どうだ、行って見る気かい」と迷亭君またからかいかける。

主人は吉原と聞いて、そいつはと少々逡巡の体であったが、たちまち思い返して「吉原だろうが、遊廓だろうが、いったん行くと云った以上はきっと行く」と入らざるところに力味で見せた。愚人は得てこんなところに意地を張るものだ。

迷亭君は「まあ面白かろう、見て来たまえ」と云ったのみである。一波瀾を生じた刑事事件はこれで一先ず落着を告げた。迷亭はそれから相変らず駄弁を弄して日暮れ方、あまり遅くなると伯父に怒られると云って帰って行った。

迷亭が帰ってから、そこそこに晩飯をすまして、また書齋へ引き揚げた主人は再び拱手して下のように考え始めた。

「自分が感服して、大に見習おうとした八木独仙君も迷亭の話しによって見ると、別段見習うにも及ばない人間のようである。のみならず彼の唱道するところの説は何だか非常識で、迷亭の云う通り多少瘋癲的系統に属してもおりそうだ。いわんや彼は歴乎とした二人の氣狂の子分を有している。はなはだ危険である。滅多に近寄ると同系統内に引き摺り込まれ

そうである。自分が文章の上において驚嘆の余、これこそ大見識を有している偉人に相違
 ないと思ひ込んだ天道公平事 実名立町老梅は純然たる狂人であつて、現に巢鴨の
 病院に起居している。迷亭の記述が棒大のざれ言にもせよ、彼が瘋癲院中に盛名を擅
 ままにして天道の主宰をもつて自ら任ずるは恐らく事實であろう。こう云う自分もことによ
 ると少々ござっているかも知れない。同気相求め、同類相集まると云うから、氣狂の説に
 感服する以上は——少なくともその文章言辞に同情を表する以上は——自分もまた氣狂に
 縁の近い者であるだろう。よし同型中に鑄化せられんでも軒を比べて狂人と隣り合せに居
 を卜するとすれば、境の壁を一重打ち抜いていつの間にか同室内に膝を突き合せて談笑す
 る事がないとも限らん。こいつは大変だ。なるほど考えて見るとこのほどじゅうから自分の
 脳の作用は我ながら驚くくらい奇上に妙を点じ変傍に珍を添えている。脳漿一勺の
 化学的変化はとにかく意志の動いて行為となるところ、発して言辞と化する辺には不思議に
 も中庸を失した点が多い。舌上に竜泉なく、腋下に清風を生ぜざるも、齒根に
 狂臭あり、筋頭に瘋味あるをいかんせん。いよいよ大変だ。ことによるともうすでに立派
 な患者になっているのではないかしらん。まだ幸に人を傷けたり、世間の邪魔になる事を
 し出かさんからやはり町内を追払われずに、東京市民として存在しているのではなからう
 か。こいつは消極の積極のと云う段じゃない。まず脈搏からして検査しなくてはなら
 ぬ。しかし脈には変りはないようだ。頭は熱いかしらん。これも別に逆上の氣味でもな
 い。しかしどうも心配だ。」

「こう自分と氣狂ばかりを比較して類似の点ばかり勘定しては、どうしても氣狂の
 領分を脱する事は出来そうにもない。これは方法がわるかった。氣狂を標準にして自分
 をそっちへ引きつけて解釈するからこんな結論が出るのである。もし健康な人を本位にして
 その傍へ自分を置いて考えて見たらあるいは反対の結果が出るかも知れない。それにはまず
 手近から始めなくてはいかん。第一に今日来たフロックコートの伯父さんはどうだ。心をど
 こに置こうぞ.....あれも少々怪しいようだ。第二に寒月はどうだ。朝から晩まで弁当持参
 で球ばかり磨いている。これも棒組だ。第三にと.....迷亭？ あれはふざけ廻るのを天職
 のように心得ている。全く陽性の氣狂に相違ない。第四はと.....金田の妻君。あの毒悪な
 根性は全く常識をはずれている。純然たる氣じるしに極ってる。第五は金田君の番だ。
 金田君には御目に懸った事はないが、まずあの細君を恭しくおっ立てて、琴瑟調和してい
 るところを見ると非凡の人間と見立てて差支えあるまい。非凡は氣狂の異名であるから、ま

ずこれも同類どうるいにしておいて構かまわない。それからと、——まだあるある。落雲館らくうんかんの諸君子しよくんしだ、
 年齢ねんれいから云いうとまだ芽生めばえだが、躁狂そうきやうの点てんにおいては一世いっせを空むなしゅうするに足たる天晴あつぱれな豪
 のものである。こう数かずえ立たてて見みると大抵たいていのものは同類どうるいのようである。案外あんがい心こころ丈夫じやうぶになっ
 て来た。ことによると社会しゃかいはみんな氣狂ききやうの寄より合あひかもしれない。氣狂ききやうが集しゅう合ごうして鎬しを削けず
 てつかみ合あひ、いがみ合あひ、罵ののしり合あひ、奪うばい合あひ、その全体ぜんたいが団だん体たいとして細さい胞ぼうのよう
 に崩くずれたり、持もち上あったり、持もち上あったり、崩くずれたりして暮くらして行ゆくのを社会しゃかいと云いうのではない
 か知らん。その中なかで多少たしょうりくつ理窟りくつがわかわかって、分ぶん別べつのある奴やつはかえかえて邪魔じゃまになるから、瘋癲ふうてん院いん
 というものを作つくって、ここへ押おし込こめて出でられないようにするのではないかしらん。すると瘋
 癲院ふうてんに幽閉ゆうへいされているものは普通ふつうの人ひとで、院外いんがいにあばれているものはかえかえて氣狂ききやうである。氣
 狂ききやうも孤立こりつしている間あいだはどこまでも氣狂ききやうにされてしまうが、団だん体たいとななって勢せい力りよくが出でると、
 健全けんぜんの人間にんげんにななってしまうのかも知しれない。大おおきな氣狂ききやうが金きん力りよくや威い力りよくを濫用らんようして多おほくの
 小氣狂しょうきちがいを使役しえきして乱暴らんぼうを働はたらいて、人ひとから立派りっぱな男おとこだと云いわれている例れいは少すくなくない。何
 が何なんだか分わからなくななった」

以上いじやうは主人しゆじんが当夜とうやけいけい熒々ことうたる孤灯もとの下ちんしじゆくりよで沈思とき熟慮しんてきさようした時ときの心的作用しんてきさようをありのままえがに描だき出だ
 したものである。彼かれの頭脳ずのうの不透明ふとうめいなる事ことはここにも著いちじるしくあらわされている。彼はカイゼル
 に似た八字髯はちじひげを蓄たくわうるにもかかわらず狂人きやうじんと常人じやうじんの差別さべつさえなし得えぬくらの凡倉ほんくらであ
 る。のみならず彼はせつかくこの問題もんだいを提てい供きやうして自己じこの思し索さく力りよくに訴うたえながら、ついに何等なんら
 の結論けつろんに達たつせずしてやめてしまった。何事なにごとによらず彼は徹底的てつていに考かんえる脳力のうりよくのない男おとこ
 である。彼の結論けつろんの茫漠ぼうばくとして、彼の鼻孔びこうから迸出ほうしゆつする朝日あさひの煙けむりのごとく、捕捉ほそくしがたき
 は、彼の議論ぎろんにおける唯一ゆいいつの特とく色しよくとして記憶きおくすべき事じじつ実じつである。

吾輩わがはいは猫ねこである。猫ねこの癖くせにどうして主人しんちゆうの心こころ中ちゆうをかき精せい密みつに記き述じゆつし得えるかうたが疑うたがうものが
 あるかも知しれんが、このくらいな事ことは猫ねこにとって何なんでもない。吾輩わがはいはこれで読心術どくしんじゆつを心得こころえて
 いる。いつ心得こころえたなんて、そんな余計よけいな事ことは聞きかんでもいい。ともかくも心得こころえている。人間の
 膝ひざの上うへへ乗のって眠ねむっているうちに、吾輩わがはいは吾輩わがはいの柔やわらかな毛衣けごろもをそつと人間の腹はらにこすり付つけ
 る。すると一道いちどうの電でん氣きが起おこって彼の腹なかの中ちゆうのいきさつが手てにとるようように吾輩わがはいの心しん眼がんに映えいず
 る。せんだつてなどは主人あたまがやさしく吾輩なの頭まわを撫なでで廻とつぜんしながら、突然とつぜんこの猫かわの皮かわを剥はいで
 ちゃんちゃんにしたらさぞあたたかとでよりかろうと飛りやうけんんでもない了りやうけん見みをむらむらと起おこしたのを
 即座そくざに氣取けどって覺おぼえずひひややとした事ことさえある。怖こわい事ことだ。当夜とうや主人しんちゆうの頭あたまのなかなかに起おこった以上

の思想しそもそんな訳合わけあいで幸さいわいにも諸君しよくんにご報道ほうどうする事ことが出来できるように相成あいなったのは吾輩おおいの大
に栄誉えいよとするところである。但し主人ただは「何が何だか分わからなくなった」まで考えてそのあとは
ぐうぐう寝ねてしまったのである、あすになれば何をどこまで考えたかまるで忘わすれてしまうに
違ちがい。向後もし主人こうごが気狂きちがいについて考える事があるとすれば、もう一返出直して頭いっぺんでなおから
考かんがえ始はじめなければならぬ。そうすると果してこんな径路はたを取けいって、こんな風ふうに「何が何だか
分わからなくなる」かどうだか保証ほしょう出来できない。しかし何返考なんべんえ直なんじょうしても、何条なんじょうの径路すすをとって進
もうとも、ついに「何が何だか分わからなくなる」だけはたしかである。